2025 慶應義塾大学（2/16 実施　法）小論文概評

出題分析		
試験時間　60 分	**配点**　100 点	**大問数**　1 題
分量（昨年比較）〔減少　同程度　増加〕		**難易度変化**（昨年比較）〔易化　同程度　難化〕

【概評】

昨年度までの慶大法学部「論述力」は今年度より「小論文」と名称が代わり、試験時間が 90 分から 60 分へと変更された。今回の出題内容を見ると、これまで課されていた見開き程度の課題文がなくなり、代わりに短い文章資料が課され、それを踏まえて 800 字以内で論述する問題となった。このような出題形式は 60 分で解く小論文問題としては一般的だが、中身がかなりの難問だった。問題は、法と正義に関するローマ法大全の学説を読んで、法と正義の定義をおさえたうえで、「法律の適用は正義の尊重と両立可能であるか」について、可能／不可能の両方の立場から具体例を交えて論じるというもの。抽象度の高いテーマであり、ローマ法の中身までは高校レベルではほぼ扱わないため手がかりも少ない。これを具体的な次元に落とし込んで考え、かつ 60 分で 800 字を書き切るのは至難の業である。総じて、従来の出題形式よりも難度が高い。

設問別講評

問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
一	意見論述問題（800 字以内）	まず資料として示されているローマ法大全の学説を丁寧に読み込もう。法とは「善と衡平の術」であり、正義とは「各人に各人の権利を分配しようとする…意思」であると定義されているため、ここを参考に自分なりに法と正義の関係性を冒頭で示す必要がある。それ以降は、法と正義の定義をしっかりと踏まえたうえで「普遍的な例」を挙げていくことになるが、ここでいう「普遍的な例」とは「経験や体験ではなく」との対比から、「一般的・社会的な事例」程度と考えていいだろう。法と正義は両立可能とする立場は、そもそも法と正義の定義（概念）が近接しているので、冒頭で示した法と正義の関係を具体例で示せばよい（食料や税金などの限られた資源の分配について考えるのが分かりやすい）。一方、両立不可能とする立場の論拠を示すのは一筋縄ではいかなかっただろう。手がかりは資料の「（法律は）たしかに過酷ではある…」の一節。ある正義を体現した法律が過酷に見えるのは、自身が法とは異なる正義観を有する場合である。とすれば、互いに異なる正義観（何をどう分配するのが善なのかという信念の違い）の例を挙げてみよう。ここまで来れば、世俗化した社会と宗教共同体、自由主義と社会主義、先進国と途上国など、普段の勉強で得た知識を活用することができるはずだ。	難

合格のための学習法
2025 年度から始まった慶應義塾大学法学部「小論文」の出題範囲は、「国家や社会の基本原理を中心とした諸問題について、高校卒業程度の知識を前提に、理解力、分析力、思考力、表現力を問い、論述形式で解答させる。資料やキー・ワードを与える場合がある。」（HP より）となっている。「国家や社会の基本原理を中心とした諸問題」とあるが、たとえば今年度の問題テーマである「法と正義」はそのような問題群に入るだろう。つまり、出題テーマの勉強に関しては従来通り、過去問に取り組んだり一般書を読んだりすることが有効だ。特に、今後もまとまった課題文がない出題形式が続くとすれば、論述の手がかりになるのは受験生自らの教養である。日頃から、正義や人権、自由、平等、民主主義といった法学・政治学の基本的なテーマについて考える習慣をつけておこう。論述の字数については、今後も 800 字程度のまとまった文章を 60 分間で書く出題が続くと予想される。試験時間が 90 分だった頃よりも余裕がないため、類似の出題形式を探して数多く演習にあたり、60 分で 800 字を書く感覚を養っておこう。